

V
平成から明日の三輪

一 平成の三輪

1. 三輪区の行事と事業

三輪区の役員は、区長一名、副区長一名（二名まで可）、会計、一名、監事二名、組長二十三名で構成し、総務委員会、厚生文教委員会、土木警備委員会の三委員会運営しています。各委員会の委員は年度当初の組長会で互選し、正副委員長は各委員の互選によって選出されています。各委員会が分担している恒例行事や主な事業は次の通りです。

総務委員会

総務委員会は、区自治運営の企画調整・渉外・区の予算決算のほか、他の委員会に属さない事項について担当しています。主な仕事は区長、宮総代などの役員や健康推進委員、青少年補導委員等委員の推薦。関係機関への陳情・要請、三輪神社をはじめ、区内各種団体との連携調整や、区広報の発行、同和研修などを担当しています。

最近の組の改変では平成六年に五組の人口増加にともない、四分割して五の一と五の四としました。藤和ハイタウン三田城山の大型マンション（約百三十戸）が三輪区入りし、二十四組が誕生しました。

新年当初に聞く「新年を寿ぐ会」では、関係者ら七十人が参加して互礼会を開きます。参加者全員が輪になり、順番に握手して回る輪番握手をしながら、それぞれ新年の挨拶を交わします。続いて区長が新年の抱負を語り、市の幹部、財産区議長、三田ゴルフクラブキャプテンらから祝辞を受けます。



区民レクリエーション大会を楽しむ子供たち

厚生文教 厚生文教委員会は、衛生・体育・福祉・社会教育等を担当しています。衛生関係では年五回クリーンデーの実施、市衛生推進協議会への協力、ゴミ袋・殺ソ剤等衛生薬剤、生ゴミ処理容器の斡旋配布、下水溝等の清掃、市民総合検診など。

体育関係では、市民運動会、地区運動会の選手の人選、区民レクリエーションの用具、器具をはじめ、湯茶、弁当の準備をします。また、地区体育振興会への協力、三カ月に一回三田ゴルフ場で「三輪会ゴルフコンペ」を実施しています。

福祉関係では、社会福祉協議会への協力、市民会館で開かれる地区敬老行事の協力、区敬老行事の開催、共同募金、歳末愛の助け合い運動の推進、社協会費の集金など。

社会教育関係では、三輪神楽や織差し、市指定無形文化財の波字也踊り、御当行事など郷土芸能の保存研究、夏秋祭礼行事の役割を決めます。また、区民文化祭では、毎年、三輪会館で「文化の日」を中心に区民が丹誠込めて作った菊花展や絵画、書道、写真、陶芸、手芸などの展示、区民サツキ祭の協賛実施を担当しています。

三輪区主催、三輪商店振興会共催の「納涼盆踊り・カラオケ大会」は、八月中旬の日曜日の夜に三輪神社境内で開かれます。境内中央付近にヤグラを組み、三田音頭に乗せて老人会、婦人会、子供会をはじめ区民が楽しく踊ります。境内では各種団体の協力で出店があり、生ビール、関東煮のバザーもよく売れ、輪投げ、くじ引きなどもあります。踊りの最後には抽選会があり、区内の商店、企業等から寄せられた景品もあり、目当ての商品が当たると歓声が上がります。

十月の月末の日曜日に三輪小学校運動場で、三輪区だけの「区民レクリエーション大会」が催されます。以前は「区民運動会」といっていましたが、勝負にこだわる種目よりも、参加することが楽しくなるようなゲーム感覚の種目を増や

しました。景品もじゃんけん大会の優勝者にはマウンテンバイクが当たるなど豪華なものもあります。

土木警備 土木警備委員会は、土木・消防・保安等について担当しています。土木関係では、三輪東公園の整備、草刈り委員会 等の美化、樹木の管理、設備の整備、県市道の整備事業の協力、生活道路の維持補修と管理、舗装工事など。

消防関係では自治消防の充実、消防器具、機材の整備、防火用水池の維持管理、防火水槽の新設など。また、区民を対象に、火災予防と消火器取り扱い講習会、家庭用消火器の共同購入、区備え付けの消火器具の管理などもしています。正遷宮のときには農会とともに、「胴」「轆」「竿」に使う竹の準備に当たりました。

保安関係では、防犯協会活動の協力、防犯灯の新設管理、災害発生時の土木事業、防犯協会、防犯灯の設置希望箇所の調査などを担当しています。

火災は初期消火で被害を最小限にすることが何よりも大切です。昭和四十四年六月に御旅所の地下に防火水槽を設けました。この敷地は約百三十平方メートルあり、このうちに縦横六メートル、深さ一・二メートルで、有効水量は四十三・二立方メートルあります。ここには御輿みこしの大きな石があり、水槽の設置位置にかかるため、いったん移動し、水槽を設置後、元の場所より一メートルあまり後ろへ下げました。また、このとき神分踏切側の道路脇にあったカイツカも、水槽の位置にかかるため、北側に移設しています。五十二年には十三組内に工費二百三十万円で貯水量四十トンの防火水槽が完成しています。この他、区内には藤の森神社、大井元付近、丸大ハム工場敷地内、三田ゴルフ十七番グリーンの奥、三輪会館前などに防火水槽が設けられており、区内の設備は充実しています。

2. 団体、クラブの活動

老人クラブ

三輪老人クラブでは、年間を通じて他の老人クラブでは例を見ないような多彩な活動を繰り広げています。まず新年会は、三輪会館内に祭壇を設け、小田文雄宮司が祭主となって新年祈願祭を行います。続いて互礼



三輪公園で老人会の花見の宴

会に入り、来賓の祝詞のあと、昼食を取りながら創作劇や舞踊、社交ダンス、詩吟等の諸芸を披露してお正月を祝います。また、一月から二月にかけて数回にわたって小倉百人一首のカルタ会を行い、バラ取りや対抗競技を実施して頭の若返りを図っています。

四月の総会では、花見を行事の一環に組み入れています。桜花爛漫の三輪公園に帳幕を張って箏曲を流し、花見の雰囲気を高めます。このとき平安の歌人を偲んで優雅に歌を詠む会員もあり、また会場に設けられたお茶席で野点を楽しまつなど、ゆつくりとくつろぎます。午後は新年会にならつていろいろの行事を行います。

世代交流行事としては、三輪小学校ゲートボール部の児童十数名を対象に、ゲートボールの指導をしています。練習は学校側の希望で月二、三回行い、一回の練習は約一時間を目途に、担任の先生に連れられて出場し、熱心に練習に励みます。

ときには老人会員とも競技を行い、愉快に時間を過ごすこともあります。学年末には現場で簡単なお別れパーティを開きます。そのとき児童から「一年間教えていただいたありがとうございます」、「お陰でルールもよく分かりました」などの礼状が手渡されます。

平成七年の秋に戦後五十年の節目にちなんで、回顧写真展を実施しました。これは若い頃に撮った自分や家族等の写真を持ち寄って、戦争前後の苦難の時代を忍びながら、その映像から「若さと元気」を甦らそうという発想で計画されたものです。このとき塔下市長や井原県会議員からも若い頃の写真を出品していただきました。また会員からの出展希望者も予想を遙かに上回り、二百余点の写真が集まりました。また、当時の生活用品や戦争にゆかりの千人針や日の丸の寄せ書き、奉公袋やその内容品などのほか、なかには出征にあたって決意のほどを認めた血書きのハンカチも出品され、参観者に深い感銘をあたえました。このような催し

は時宜を得た行事として内外からの高い評価を受けました。

十二月は三輪会館でクリスマス会を開催しています。前日には役員が総出で室内装飾を行います。飾り付けの材料は岡尾ダンス講師の提供によるもので、豪華な仕上がりは絢爛華麗^{げんらん}。初参加の人から驚嘆の声が出るほどです。当日の定刻には、ドレス姿に若返った女性会員やスーツ姿に威儀を正した男子会員が集まります。セレモニーが終わると、シャンパンを抜く景気の良い音や、コメットのはじける発射音が交錯して場内は一気に盛り上がります。これ待ちかねたように男女のペアがワルツ、タンゴ等の曲に合わせて踊り、パーティは最高潮となります。中には九十歳を越える男性会員も軽やかなステップを披露します。

その他、ボランテア活動、とりわけ寝たきり老人の慰問や奉仕作業、さらには区主催の花いっぱい運動や盆踊り大会など、地域の行事に溶け込んで活発な活動を続けています。

三輪老人クラブは区内だけでなく、市外にも出かけて活躍しています。平成五年八月、西宮市で開かれた「兵庫の祭りふれ合いの祭典」93「阪神シルバー芸能コンクール」に三田市代表で出演し「生き生き賞」、特別賞「子猫賞」を受賞しました。

九年度の「三輪地区老人つどいの日」では、市総合福祉保健センターで自作自演の寸劇や社交ダンスなどを披露し、参加者から大きな拍手を受けました。

三輪婦人会

婦人会では会員を対象に講習会、健康教室、視察旅行、ボランテア活動等を展開しています。講習会では年度によって着物着付け教室、カラーアナリストを講師に迎えて色について色彩分析講座や実用書道教室を学んだり、手芸教室では「ちぎり絵」や「クリスマスリース」を作っています。また、ハンギング・バスケットでは春を呼ぶバンジー、ピアノなど色とりどりの花を寄せ植えて楽しみました。参加者三十八人が半日ばかりで七十八鉢を仕上げ、自宅や三輪本通りなどに飾り付けました。この他、ハガキに絵を描き、ひとこと添えて送る絵手紙教室では「下手でいい、下手がいい」を合い言葉に、手軽に自分を表現し、知人に送っています。健康教室では「バターゴルフ」やヨーガ教室など。



婦人会の絵手紙講習会

また社交ダンス教室では軽やかなステップを踏み、体力づくりと趣味を深めています。

年一度の視察旅行は、平成になってから三方五湖、倉敷、海遊館、奈良・法隆寺、平等院・万福寺、姫路・湯郷温泉、関西空港・淡島神社や秀吉ゆかりの長浜と薬草の宝庫・伊吹山へ行き、会員の親睦を深めています。

ボランティア活動にも積極的で、阪神大震災のとき、テレビ、新聞等で近隣市の大災害を知り、少しでも力になりたいと、早速会員が支援の品を持ち寄り、義援金を募り、市連合婦人会を通じて被災地へ送りました。また、会員の中には楽寿荘へ炊き出しの手伝いに行った人や神戸の老人ホームが壊れて四辻の老人福祉センターが臨時の避難所となり、婦人会が交替で入所者の食事づくりの応援に行きました。

市制施行当時の昭和三十三年頃は、会員は百八十八人でしたが、五十二年の二百四十七人をピークに下降線をたどり、現在では六十四人と減少しています。会の名称を一新して会員をひとりでも募ろうと、平成八年度に区広報紙「みわのさと」で「婦人会」の愛称を募集しました。その結果、二十数点の応募があり、その中から五点を選び、会員全員が投票の結果、「Ms（ミズ）わかすぎ」に決まりました。Ms（ミズ）とは既婚、未婚を問わず女性の総称で、「わかすぎ」は三輪との関わりの深い言葉です。

また、伝統行事への参画では、平成十年、三田天満神社の正遷宮のとき、神社へ奉納する五反織三流れを製作。三輪区が奉祝する当日は会員三十人が揃いのハッピーにいなせな鉢巻き姿で、餅御輿を繰り出し、天満神社へ三斗の餅を奉納しました。この他、区主催の文化祭や盆踊り、敬老会にも協賛し会員が参加しています。



農会の人たちによる「胴」の油ぬぎ

また、三田天満神社の正遷宮の時には、囃子の「胴」作りを担当しました。駒宇佐八幡神社の許可を得て、敷地内の竹藪から太さ二十センチもある竹を根元から掘り、油ぬきをして「胴」を仕上げます。太鼓と釣り鐘を取り付けるしめ飾り結びは見事なもので、農会で作った囃子の「胴」は万博博跡地にある国立民族学博物館で永久保存されています。

大正時代に石井永之介の働きかけで三輪実業協会を設立し、その後、三輪商工会、三輪町商工会、三田町商工会と合併し、その下部組織として活動を展開してきました。

振興会では大売り出しの旗三十本を新調、「日の丸」五十本を購入し、催しや祝祭日のときに本通りに掲揚しています。また、下水道工事を機に、古い街灯を撤去し、二年五月に新しい街灯二十六本を設けました。

元旦には三輪神社の社務所付近で参拝者に「ぜんざい」を奉仕で提供。八月の三田まつりのときには市役所前通りで綿菓

三輪農会

農会では毎年、田植え前に水路の流れをよくするため、五月に水路の掃除をしています。最近人家の増加にともなう農業用水に生活用水が流入し、灌漑用水の汚れが目立ってきています。

六月には三輪大池の弁天まつり、九月にはため池の草刈りをします。十二月には区民を対象に、しめ縄作り教室を開いています。農会の経験者の指導で仕上げ、元旦には手づくりのしめ縄が参加者した人たちの玄関に飾られます。また、年末には農会の人たちによって三輪神社大鳥居のしめ飾りをはじめ、神社に飾るすべのしめ縄が作られます。

この他、危険ため池に指定された下池の改修、三輪大池樋門改修、東谷川一部災害工事、西谷川樋門の改修、徳間池の改修工事、住吉線農道と水路の整備、長田水路、長田片浮線水路改修工事、ニチイから西百郎の水路の改修、西谷川に沿った歩道等の整備協力にあたっています。



消防団による消火訓練

子、金魚すくいなど夜店を出店したり、区民盆踊り大会には区に協賛して賞品を提供しています。

市消防団第二分団第一班

三輪消防団は、市の消防操法大会で第二分団の代表として出場してポンプ操法等で再三優勝するなど、高度な操法技術力と絶妙のチームワークを誇っています。年間を通じて地域の安全をはかるため、住居密集地での火災の未然防止、毎月第一日曜日に消防器具・器材の点検整備をしています。また、火災器具の取り扱い講習会、消火訓練、水防訓練、家庭用消火器の共同購入、防火用水池、防火水槽の維持管理にも努めています。

近年の火災の発生状況を見ると、六十年に区内で火災一件発生。また、平成四年十一月から翌五年二月にかけて連続不審火が発生し、住宅、倉庫、作業所、空き屋等が焼けました。消防団員を始め区民が深夜に警戒パトロールをしました。なかでも二月二十二日深夜、三輪三丁目、西本製材所の製材工場東側から出火、鉄骨スレートぶき二階建て延べ約八百平方

方メートルの工場と中にあつた材木などが全焼。さらに北隣の宮崎畳店の作業所兼倉庫に燃え移り、鉄骨トタン葺き一部三階建て延べ約六百平方メートルの同倉庫が全焼し、約三時間後に消し止められました。この火事で、三田市消防本部と三田市消防団の地元第二分団をはじめ四分団、神戸市北消防署出張所にも応援を求め、消防車十五台、二百六十人が出動しました。このとき西本製材所の倉庫に保管されていた川舟も焼失してしまいました。

この間、三輪区などでは「放火火災防止対策会議」を開いて対策を協議。「家の周りを明るく」、「車に燃えやすいシートはかけない」など、放火されないための注意を細かく書き込んだチラシ二千枚を各戸に配ったり、区民は三カ月近く毎晩四人一組で延べ二百四十人が夜間の警戒パトロールを続けました。連続放火犯は五月に逮捕されて不審火は終止符を打ちました。

区では自衛消防で区民を守るため、平成九年六月に新しいポンプ（トーハツV

30AS可搬式)を購入し、三輪神社で入魂式を済ませ、三輪会館前で放水式を行いました。これまで使用していた二台の内一台が二十五年経過して古くなったため、より性能の高い機種を導入したもので、本体価格は七十五万円、周辺機器を含めて百万円です。その内、市からの助成金は三十一万二千円でした。また、秋祭りを前に九月末、火の見櫓の塗り替えをしています。

青年団と神楽保存会 幕末から大正にかけて三輪には、三輪神社の神事に携わる人々で結成された祭礼講(地家)と神楽講(町家)があり、それぞれが祭り事に参加していました。今の時代と違って若者にとっては、最良の集いの場であったようです。



青年団による初詣参拜者に配る餅焼

昭和のはじめ頃、神楽講の十三歳から二十五歳の若者たちが集い、三輪青年会を結成しました。活動としては夏祭り、秋祭りの一切を請け負い、御輿、太鼓の組み立て、片付け、供奉行列の役割の決定などもしました。また神楽の奉納、とくに町回りといって祭りの宵宮、夏は七月八日、秋は十月八日の朝四時から夕方の七時まで十名が一組になり、地家班、町班、上野班、成谷班と四組に分かれて獅子を舞い、氏子衆に喜ばれました。その後、青年会の解散で長年引き継がれた伝統の灯火が消えかけましたが、祭り事については、三輪区の組長たちが太鼓の運行および供奉行列、役割等を受け継ぎました。また、神楽については、三十九年に青年会OBたちで神楽保存会を結成し、荒神払い等の伝統を受け継いでいます。

その後、三輪の青年有志が昭和四十二年に「ふるさとを考える青年の集い」という会を作り、三田市で永い間途絶えていた「郷土の盆踊り」を復活させました。第一回は内田ガソリン裏駐車場、第二回は駅前ロータリーで「ふるさと市民盆踊り大会」を催し、その後、駅前商店会に引き継ぎました。これが三田市主催の

「さんだまつり」につながっています。

やがてこのメンバーが中心となり、四十三年に豊かな地域と青年個々の教養を高めることを目的として、三輪青年団を再結成しました。活動としては祭りの行事に積極的に関わるほか、神楽保存会に入会する一方、機関誌の発行など文化活動を展開しました。またマラソン大会、柔道大会など体育活動のほか、お年寄りの体力測定、一七六号線の騒音測定、三輪公園の草刈り作業など奉仕活動をしてきました。しかし、会員の減少もあって、六十三年に解散してしまいました。

その後、三田天満宮の正遷宮も近づいた平成九年十二月に三輪青年団が再発足しました。発会式では柳青年団準備委員長が「九年七月ごろ、先輩から青年団の話があり、五カ月間募集活動をしたところ、紅一点の女性を含め九人の団員が集まりました」と挨拶。続いて役員選出に移り、団長に柳政宏、副団長に国森茂、坂野上茂樹、会計に田中隆を選出しました。三輪青年団のおもな事業としては、三輪区行事への参加と協力、ボランティア活動やレクリエーションなどです。団員の資格は区内に在住の十三歳から二十九歳の男女と、報告がありました。

続いて来賓の挨拶では、石井区長が「皆様方にはこれから区の行事に積極的に参加してもらい、それによって区の良さを実感してもらおうことができると思います。これからは青年団活動を通じて君たちの人格形成に役立て、先祖から引継いだ三輪の伝統を君たちの次の世代に贈ってください」と励ましました。

また、白井三田市教育委員会青少年課長は、現在の若い人は無関心、連帯感の低下などの意識が強く、ひとつのものをままとめるのが難しいことと思います。相談してくれる先輩もたくさんいますので、結成した以上、長く続けられるようにしてほしいと思います。区民に愛され、一人でも多くの若者が入りたい、入ろうと思うような会にしてください」と激励しました。

さっそく十二月には、子供会のクリスマス会でクイズを出して好評を得、大晦日には景気良く三輪神社参拝者に振る舞う紅白の餅つきをしています。特に三田天満神社の正遷宮のときには職差しの差し手として中心的役割を果たし、本番の時には鳥居越等の妙技に観覧者から大きな拍手を受けました。現在十五名の若者がボランティア活動を中心に、新しいふるさと



子供会のクリスマス会

づくりをめざして活動中です。

若杉子供会

子供会は昭和二十四年に三輪小学校PTAの下部組織として発足し、その後、社会奉仕、地域との連携、伝承文化の継承など多様な活動を繰り広げています。

社会奉仕では、年三回のクリーンデーに五、六年生約二十人が参加。軍手をはめ、手には火鉢みをもって、三輪公園の空き缶やゴミ拾いをしています。また、子供会の親達で年間三回の廃品回収をしています。以前は子供も参加していましたが、廃品収集箇所等での作業で危険ともなうため、最近では親達だけでしています。近年は古紙等の単価が低く、収益は四、五万円程度ですが、市からの奨励金もあり、ゴミの減量化、資源の再利用に役立っています。また、平成六年から年末には五、六年生二十数人が年末夜警に参加しています。三輪消防団員のお兄さんたちと、冷え切った夜間に「火の用心」のかけ声とともに拍子木を鳴らしながら、区内を巡回。なかには消防自動車に乗せてもらって感激した児童もいました。

地域社会との関わりでは、夏秋祭りに御旅所から神社境内まで提灯行列で参加。秋祭りには三年生以上の男子と女子がそれぞれ子供御輿をかつき、四年生の男子の中から「ふとん太鼓」の太鼓を打つ児童が選ばれます。平成七年度からは巡行の際の役付けに女兒も参加するようになりました。また、平成十年は三田天満神社の正遷宮のときに五、六年生の男子は轎差し、女子は囃子の笛を練習。三田天満神社へ手拭い幟三本を奉納しました。

また、バス旅行やクリスマス会、スケート教室に参加するなどレクリエーションも楽しんでいきます。最近のバス旅行は、八年度は和歌山県のマリーナシティ「ポルトヨーロッパ」と「黒潮市場」へ。また九年度は大阪ドーム、大阪市立科学博物館等を見学しています。七年度は、スケート教室の懇親会を取りやめ、阪神大震災に義援金を送りました。盆踊りのと

きのカラオケ大会では、高学年がリコーダー、低学年が若杉子供会の歌を発表し、子供会活動を区民のみなさんに披露しました。

クリスマス会では、鈴の音と共に赤い服に白い髭のサンタさんに扮した石井区長が入場。サンタさんからひとりずつお菓子和図書券等の入ったプレゼントをもらって大喜び。青年団のお兄さんたちのクイズを楽しみ、昼食には五、六年生のお兄さんやお姉さん、お母さんたちが作ったサンドイッチをいただきながら、親睦を深めました。

お別れ会は三輪小学校終業式の日の前後に行います。お別れ式では六年生に感謝の気持ちを込め、登校班の代表が花束と記念品を手渡し、区長からもお祝いの言葉と記念品が贈られます。五年生の代表が六年生に贈る言葉を述べたあと、今度は六年生が一人ずつ感想を言い、風船割りや手つなぎ鬼ごっこ、ビンゴゲーム等を楽しみました。最後に全員が手をつないでアーチを作り、その下を六年生が通って果立っていきます。

若杉子供会の運動クラブである三輪ファイターズは、野球を通じて健康な体とたくさんの友達を作り明るい学校生活を送ることをめざしています。三輪リーグ、三田リーグに参加し、試合に練習に励み、夏にはキャンプ、プロ野球観戦などでチームの結束を深めています。

3. 町の模様

祭礼の変 社会情勢の変化によって太鼓のかき手が年々減少するので、どうすればよいかが問題になりました。平成三年更を検討 に区民にアンケート形式で祭日の日程について意見を聞きました。すると約六割の区民から「週休二日制の普及で平日の休暇を取るのが難しいので、翌日の十月十日（体育の日）にした方がよい」という意見が出ました。

その後、関係者によって慎重に議論されましたが、「神事、祭祀に関わることは、先祖から受け継いだものであり、不動のものである」という意見も根強くあり、区では神社総代会に意見を求めました。その結果、アンケートで「変えた方がよ



昭和初期三輪神社前の家並み

い」という区民の声も無視できないとして、平成八年二月に「秋祭りの奉賛行事は五年の猶予期間を経て、平成十三年までに方法論を策定して実施すべきである」という総代会の結論を区に報告。それを受けて組長会でも報告されています。

三輪区の戦前 平成三年の区民文化祭で、三輪一丁目の坂田家に保存されている写真保存 三輪近郊を撮した千枚にのぼる写真フィルムの中から選りすぐった写真が展示されました。

これは明治四十年生まれの坂田清が実家の薬局を営む傍ら、大正末から昭和二十年代までの間、三輪区内を中心に写真を撮り続けたものです。とくに戦前は写真機を持っている人も少なく、戦中はフィルムもなくなっていますので、当時の写真は三輪区だけでなく三田市にとっても貴重な資料となっています。

ネガの内容は、昭和十年代の三輪の家並みのほか、十四年ごろの三輪神社秋祭りの赤鬼・青鬼、戦時中の牛を使った水田の草取り競技会。戦前の三輪区の家並みや戦時中の出征兵士の見送り、風景、勤労奉仕に精を出す子供たち。三輪国民学校の運動会のフンドシ体操、校庭で遊ぶ子供たちの姿などさまざまで、当時の三輪の風景、時代の面影を伝えています。

これらのネガの中から五百枚の写真焼き付けし「ふるさと三輪今昔」と題し、①家並み ②祭り ③人たち ④子供たち ⑤三輪小学校 ⑥農作業など八冊にまとめています。そのうちの一部は区広報「みわのさと」や神戸新聞にも特集として掲載され、「三輪区史」にも二十二枚紙面を飾っています。

ふるさとつ 三輪区は平成四年度の三田市「ふるさとづくり賞」に選ばれ、五月二日に市民会館で開かれた区長自治会長くり賞受賞 連合会の結成二十周年記念総会で、表彰されました。この賞は前年度に創設され、地域住民の連帯意識づくりなど、地道なコミュニティ活動を続けている市内の自治組織に贈られているものです。



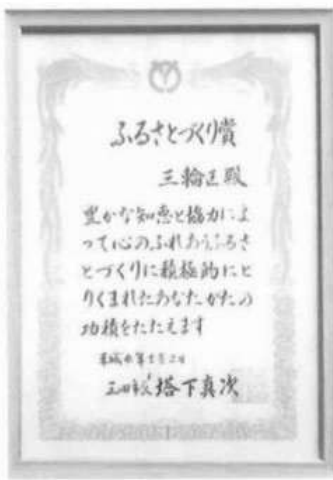
市指定文化財になった来迎寺の陶墓

この陶墓は慶応四年（一八六八）に、三田青磁を広めた陶工・亀居貞次郎が両親ら四人を供養するため建立したものです。幅二十寸、奥行き十八寸、高さ八十二・五寸。白い陶器に家紋のタチバナを青色の釉薬で色づけし、紋が鮮やかに浮かび上がっています。戒名を記した塔柱の上には唐破風造りの屋根を乗せた形となっています。

貞次郎が、自分の師匠筋に当たる欽古堂亀祐が京都の菩提寺・専称寺に陶墓を建てており、これをまねて、三輪明神窯陶墓を焼成したものとみられています。陶墓の場所は、三輪明神窯から約三百五十メートル北西にあたる来迎寺墓地内で、正面の高台の奥にあります。

水引幕を修理

ふとん壇尻の水引幕の縫い取りがほつれて、内部の綿がはみ出すなど、傷みが目立ってきました。このため平成五年の秋祭り後、大修理を計画。専門業者の神戸市長田区の岩根社寺工芸社に依頼して、翌六年二月から七カ月間かけて使える部分は最大限残して修理し、九月に完成しました。



三輪区が受賞した「ふるさとづくり賞」

三輪区の表彰理由は、年二回、区広報紙「みわのさと」（B5判十六六）を発行し、毎年十一月には三日間「区民文化祭」を開催するなど文化活動を続け、地域のコミュニティづくりに寄与していること。また、区民が手を携えて、心とむ郷土を作っていることなどが認められました。

幕末の陶墓が指 平成四年七月、来迎寺の墓地内にある陶墓が市の指定文化財に 文化財に指定されました。陶墓は市内に一基しか

なく、全国的にも珍しいといわれています。



修復されたふとん太鼓の水引幕を報じる神戸新聞

に縫い上げてあります。

この水引幕の制作年は不明ですが、納め箱には「慶応三年（一八六七）」と墨書されており、江戸末期に奉納されたものとみられています。その後、明治二十年と同三十五年に修復されています。

修復後の水引幕は祭りの前日に三輪会館大広間に飾り、区民に展覧しました。総経費は千三百七十万円。このうち「水引幕」だけで千万円かかりました。このとき成谷も費用の一部を負担しました。三輪神社の秋祭りを彩るふとん太鼓「二基の水引幕」が約一世紀ぶりに修復され、金糸や銀糸を縫い込んだ本刺繍はきらびやかに蘇り、区民はその見事さに目を見張りました。

平成八年にふとん太鼓関係で総額二百七万円の修理をしました。主な内容は、太鼓提灯の補強と太鼓櫓干四柵の新調百七万円。太鼓の皮張替四十二万円。子供御輿の長棒二本と飾りロープ新調四十二万円。年番用ハッピー新調四十着十六万円。

阪神大震災で 平成七年一月十七日午前五時四十六分、淡路島を震源とする阪神大震災（マグニチュード7.2）が発生
杜寺に被害 しました。淡路、阪神間で死者約六千人、負傷者約四万人、倒壊家屋約四十三万世帯、焼失家屋約九千世

帯にのぼり、交通機関が一時不通になるなど大きな被害を受けました。三輪区内では倒壊家庭はありませんでしたが、屋根

「水引幕」というのは、ふとん太鼓の台の四本柱上部に張り巡らす幅一丈、長さ四尺の飾り幕です。この幕の絵柄は、地家の祭礼講は、素戔鳴尊が大蛇を退治する神話を題材にしたものといわれ、町の神楽講の幕は、賤ヶ岳の秀吉と柴田勝家との戦いの模様を、カラフルな刺繍で仕上げています。柴田方は鉄棒を担った武士、秀吉方は加藤清正、福島正則と見られる武将が槍を構えた姿をあしらった勇壮な合戦シーンです。背後で白馬に乗っているのは秀吉だといわれています。いずれも深紅の羅紗生地の色とりどりの刺繍糸で丁寧に



再建された三輪神社の大鳥居
(神戸新聞)



阪神大震災で倒壊した三輪神社の石灯籠

瓦が落ちたところや灯籠などが倒れるなど大きな被害を受けました。三輪区ではさっそく消防団が被害調査にまわり、婦人会員が阪神間に向けて救援物資の仕分けをして発送したほか、現地へ送る炊き出しや募金も行いました。

未明の激震で三輪神社では、特に石造物に大きな被害を受けました。大鳥居はこのときの激震で横石の二段目に当たる「ぬき」にひびが入り、境内にある灯籠も十六基が倒壊しました。またこの日は朝六時半から御当行事の最終日でしたが中止されました。

この大鳥居は国道一七六号線の側にあり、専門家に大鳥居の診断してもらったところ、「余震があれば倒壊の恐れがある」との報告を受けました。神社関係者で協議をした結果、万一、大型車の通行の振動で倒壊しても大変と、震災三日後に解体をしました。古い石材をそのまま使って再建の方途を模索しましたが、石質の風化も進んでおり、重要な箇所も損傷も見られ、新しい材料で再建することにになりました。

旧鳥居は元禄十四年（一七〇二）二月、当時の三田藩主九鬼隆方の命で、神社の補修を行ったときに鳥居も併せて造築されたものです。高さは五・二八尺、幅五・六尺の八幡（明神）型鳥居で、昭和三十七年に参道前の国道一七六号線が拡幅したときに、神社側へ移転し修復しています。

六月に入って全氏子に「三輪神社大鳥居の再建に伴う寄付金のお願について」を発送。目標額七百万円を目指して募金を始めました。新し

い鳥居は以前のものとそっくり同じ規格とし、材質は白御影石（まがけいし）としました。神社に向かつて右側には「平成七年六月吉日再建 元禄十四年辛巳二月吉日建立 今度阪神大震災ニヨリ再建」。左側には「奉獻氏子中」と彫り込まれています。

事業費は総て氏子の寄付によるもので、計九百七十五万円が集まりました。このうち大鳥居の建立費が六百五十万円。その他は灯笼の新調、修復等の付帯工事を行いました。再建前の石鳥居のうち「元禄十四年」の元号が刻まれた柱の部分は、神社階段中段東側に保存されています。

また、破損した灯笼のうち、三基は修理が不可能で新調することにし、他は旧石大鳥居の石材を利用して灯をともし部分の火袋を製作し、復元しました。これは石質が同質だったので、できるだけ原形に近い形で修復できました。その他、損傷が軽度のもものは石膏ボンドで修復しました。

これら震災による被害の修復が総て終わり、七月七日に拝殿で氏子総代や塔下真次市長ら三十人が参列して、鳥居再建報告祭が行われました。午後七時に参列者が石段を下り、正面に回って新しい鳥居をしすしと通り初め。再び神殿へと引き返し神事を行いました。

一方、来迎寺でもこの震災で、五十九年に改築したばかりの本堂などが大きな被害を受けました。本堂の白壁は縦と横に大きな亀裂が走り、大線香立、大香炉、灯笼、花立、木製蓮華などがすべて下に落ち、線香立や灯笼などの灰と花立の水がこぼれ、床の上は散乱しました。位牌堂もほとんどの位牌が下に落ち重なり、尊像は畳の上にひっくり返りました。

玄関客間の柱の一部が西に動いて隙ができ、外の廊下の屋根瓦が一部落下、塀の瓦はほとんど形を止めないような状況でした。背部の墓地では石塔が倒れたり、石碑が横にずれました。幸い全国の宗門よりの見舞金、農協建物共済よりの保険金で、平成七年十一月から修復にかかり、翌年三月までに塀を含めすべて工事が完了し、復旧しました。

このとき、酪農センターの空き地に、震災で飼主がいなくなったイヌやネコを預かる一時飼育センターが設けられました。

三輪東公

八年二月から整備を進めていた三輪東公園が完成し、四月に竣工式が行われました。神社太鼓庫から丸山に向

園竣工

かう斜面を整備して設けられたもので、広さは約百平方メートル。山側には展望台もあり、神域の外側をぐるりと散



三輪東公園の竣工式

策ができ、神社西側に通じるようになっていきます。工費は約四百万円。公園にはサクラ三十本の他、サツキ、ツツジ、ツゲなど合わせて約三百本の苗木が植えられています。

この東公園には、水飲み場のほか、消火栓や街灯も二基取り付けられており、遊歩道には道案内の標識も設けられています。また、地家の人たちが、城山マンシヨンの横を通って、ゲートボール場へ行けるようになり、神社をはさんで旧道と新道をつなぐ近道としても役目も果たしています。

この東公園の完成で、従来からあった中央公園と合わせ、神社の両側に公園ができたこととなります。

長谷川さん国 平成八年四月、三輪四丁目の長谷川円さん（一七）当時、夙際大会で優勝 川高校三年生IIが、フランス・ラバール市で開かれた「フランス国際ジュニア柔道大会」の52歳級で優勝しました。同大会は世界ジュニア大会に次ぐランクの大会で、三田市内に住んでいる選手が国際大会で金メダルを獲得したのは長谷川さんが最初です。

長谷川さんは二段。身長は一・五六メートル、体重五十二キログラムで、得意技は背負い投げ、大内刈りなどです。長谷川さんと同クラスには各国から二十六選手が参加。一回戦は不戦勝。二回戦はドイツの選手と対戦し、大内刈りから押さえ込みの連続技で一本勝ちして波に乗りました。フランス、ベルギーの選手を次々と倒し、決勝戦はポーランドの選手をそでつり込みの「技あり」から「押さえ込み」で一本勝ちしました。

長谷川さんは三輪小学六年生のときに父親のすすめで、市内の町道場に通り始めて柔道を覚えました。卒業後、八景中学校に進みましたが、同校には女子の柔道部がありませんでした。ソフトボール部に籍を置いていましたが、「もっと柔道がしたい」と、一年生の二学期に関西では女子柔道部の名門である夙川学院中学に転校、柔道の練習を再開して、指導者にも

恵まれ、めきめきと腕をあげました。

三月に東京武道館で開かれた全国高校選手権の52*級で優勝をし、フランス大会の派遣選手に選ばれました。地元三輪区では長谷川さんの優勝を祝って三輪会館で祝賀会を開き、関係者百人が今後の活躍にエールを送りました。長谷川さんには同年七月、市制記念式で「国際的、全国的なスポーツ大会で活躍した」として「スポーツ賞」が贈られています。

秋祭りに姉妹都 九年十月にユースフェスタの交流学生として姉妹都市のオーストラリア・ブルーマウンテンズ市、アメリカの学生が参加 リカ・キティタス郡、韓国・北済州郡から中高生二十一人が三田市へ訪れました。このうち数名が九日

の午後三輪神社の秋祭りに参加し、ふとん太鼓をかくなど日本の伝統行事にとけ込み、国際交流を深めました。

このときの模様が、アメリカ・キティタス郡のデイリーレコード新聞に特集として掲載されました。三輪神社の秋祭りの部分は次のとおりです。



三輪神社の祭りが報じられた米国の新聞

We wore our happy coats and walked to a local festival in the Miwa district of Sanda. Jessica captured with her camera the narrow streets and the festive atmosphere. Our walk ended at a Shinto shrine. We looked around and then we were told that two warring groups were going to battle. I looked for Toby, Ben and Bill to tell them about the upcoming battle. I saw them at the bottom of the steps of the shrine where there were some food stalls set up. The next time we saw them they were part of the "battle." They were on the victorious team. Tired but victorious.

おおよその意味は「私たちは（市教委からいただいたユースフェスタの）ハッピを着て、歩いて三田市三輪地区の秋祭りに見に行きました。ジェシカはカメラで狭い通りにあふれるお祭りの雰囲気撮りました。私たちの着いたところは神道の神社でした。（境内の）あちこちを見て回り、上がってくる二つのふとん太鼓が戦うことを知り、トビー、ベン、ビルの三人



御旅所前を通過する正遷宮の「胴」

にそのことを告げると、三人は神社の階段を降りて露天が並ぶほうへ行きました。そして次に彼ら三人を見つけたら、太鼓を担いでいるときでした。彼らのチームの太鼓が勝ち、疲れても勝利の気分を味わいました」

三田天神

十年四月十日から十二日の三日間、三田天満神社で正遷宮が催されました。本番の一年前に天満神社正遷宮実

へ幟奉納

行委員会から、三輪区へ正遷宮の日程説明と協力要請がありました。三輪区では二十五年に一回しか巡って来

ない祝事であり、七年後に三輪神社の正遷宮をひかえており、総力を挙げて祝いに行くことにしました。行事が決定されてから晴れ舞台までの間の準備は大変で、区民全員に協力要請を出しました。とくに幟差し、囃子については差し手の候補者となる十七歳から三十歳の若い衆や消防団員、神楽講の協力が必要です。農会は「胴」づくり、婦人会は幟の作成や餅御輿の奉納、老人会は囃子や行列の参加、子供会には手拭い幟などとそれぞれ分担して準備を進めてきました。

当日は午前八時二十分に三輪神社前に集合。神社前階段付近で全員の写真撮影の後、本殿でお祓いを受け、石井顕助区長の挨拶に続いて行程の説明がありました。衣装は秋祭りのユカタで下着は白のシャツに白のバッチ、足元は地下袋に統一。三味線はスゲ笠、手甲、脚絆、草履。餅御輿は三輪の祭りのハツビに豆絞りの鉢巻き姿でした。

十時に三輪神社大鳥居前を出發。行列の編成は、先頭に三輪区旗、奉納の木札。区長、氏子総代会長、三輪神社宮司。続いて子供幟差し二十人、大人の五反幟三流れに二十七人、餅御輿に女性三十一人、「胴」に十五人、音頭十人、鐘・太鼓・笛・三味線が二十三人、屋台車（音響機械）、梯子に十五人、区顧問、氏子総代、老人会員三十二人が続きました。また、交通の要所には交通係が警備に当たり、ビデオ、写真担当などを合わせると総勢二百二十人の大行列です。

十一時頃に一・二番区境の一乗寺公園で幟を差したあと小休止。車瀬橋から本



天満神社で手拭い幟を奉納する三輪区の子供たち

町通り、忠魂堂を経て法務局前へ。この間、吉田音頭を囃し、電線等のないところでは幟を差して、沿道の見物客から大拍手を受けて奉納のムードもいやが上にも高まります。

正午頃、三田小学校に到着し、ここで貴志・御霊神社等から奉納に来ている幟とも合流し、昼食をとりました。午後一時過ぎに同小学校を出発。天満神社参道の大鳥居のまわりには見物客が時間前から鳥居越を見ようと待ちかねていました。三輪区の幟がトップを切って鳥居越を披露。梯子の上で幟を差し、子供幟から本幟まで六流の幟が見事に鳥居を越すたびに大きな歓声が上がりました。

神社正面の隨身門のところでは生田実宮司をはじめ神官や実行委員会役員、氏子総代が威儀を正して出迎えるなか、約二時間の道中にも疲れを見せず、三輪区の行列がしずしずと入場。餅御輿と「胴」、屋台車は右側の入口から境内に入りました。二時頃から境内の舞殿のまわりを威勢のよい吉田音頭に乘せて幟を差して巡回。拝殿正面では、三流れの子供幟の地上回転や呼び物の梯子の上で幟を差し、詰めかけた数百人の観衆から賞賛の拍手と歓声が天神の森に響き渡ります。約四十分の演技のあと、神社正面で本幟三流れと子供幟三流れが次々と天満神社の関係者に手渡され、餅御輿も奉納。三輪区の幟は本殿前の柵にしっかりと結び立てられました。大役を果たした差し手たちは、天神公園で休憩。その後も引き続き次々と奉納される貴志、上下深田、池尻の幟が終わるのを待って午後四時頃帰途につきました。

帰りは「胴」を中心に伊勢音頭を囃しながら町中を練り歩き、途中、鍛冶屋町の「飾り壇尻」の出迎えもあり、ねぎらいのこぼれを受け、無事奉納した達成感とともに一行は三輪神社へ帰りました。

この日、囃子の締め太鼓の皮が晴天で乾燥したのか破れてしまいました。収納しようとしたところ、太鼓の中でカサカサと音がするので、中を調べたところ、コヨリで結んだ紙片が出てきました。それには次の文が記してありました。

「謹書 一、三輪神社尔附由緒深支舞奏尔參與須留六人ノ内左記参名当今尔継続志都々在里 左記 一、久代平太郎 一、田中掬松 一、宮崎甚之助 神職 杉本好穂代 大正五年十月九日 右ハ文政元年九月九日尔記載アリシヲ途中ニテ紛失セリ」これは大正五年の秋祭りを前に、この締太鼓を修理したときに入れたもののようです。文面は「三輪神社に由緒深い舞奏に参与する三名、当今に継続しつつあり」と、関係者三名の名前と神官の名が列記されています。文末には「右は文政元年九月九日に記載されていたが途中で紛失した」とあります。波字也党は六名で構成されていますが、どうして三名の名前しか記していないのか不明です。三輪区では締太鼓を修理するときには、この紙片と平成十年の修理記録を記して太鼓に納めることにしています。